

---

特 集

---

第12回 (2002年) 出生動向基本調査 その2

専業主婦という生き方の捉え方  
—未婚女性の理想と予想のライフコース<sup>1)</sup>—

釜野 さおり

本稿では、今日の日本で専業主婦の置かれた立場を簡単に述べた後、第12回出生動向基本調査の独身者調査のデータを用いて、未婚女性が、(1)専業主婦という生き方を理想と考える(専業主婦願望)か否か、(2)実際に専業主婦になると考える(専業主婦予想)か否か、(3)専業主婦願望と専業主婦予想の間にズレがあるか否かと、女性の教育レベル、就業形態、収入などの社会経済的屬性、ジェンダー役割に対する意識、親密圏における異性との関係の状況との間に関連性がみられるかどうかを分析した。分析手法には、クロス集計表と $\chi^2$ 乗検定、ならびに2項ロジスティック回帰分析を用い、後者においては結婚の意思と年齢階級の影響を統制した。その結果、専業主婦願望や専業主婦予想には、教育レベルや教育コンテキスト、ジェンダー役割意識、そして異性の恋人の有無が関連していることがわかった。教育レベルの高いことが専業主婦願望を高めること、共学大学・大学院卒に比べ女子大卒であることが専業主婦予想を高めること、そして、夫は外で働き、妻は家庭を守るという形のジェンダー役割を支持することが、願望も予想も高めるとの結果が得られた。異性の恋人がいることは、専業主婦を理想的な生き方であると考えすることに貢献するが、実際になる人生としてのイメージでは専業主婦以外のものを想定する傾向を高めることが、本稿での最も興味深い知見である。今後は、男女間の恋愛関係の実態やそれを取り巻くイデオロギーについても解明していくことが必要である。

I. はじめに

本稿では、未婚女性の専業主婦という生き方に対する考え方を分析する。ライフコースとは「社会のなかで個人がどういう人生を歩むのか」(岩上 2003)ということであり、具体的には、就学、就職、退職、結婚、出産など、「人生の各段階で生じる出来事に伴う地位や役割の移行を基に描く人生の道筋」を指す(岩井 2002)。その道筋は多かれ少なかれ規則化されているが、個人レベルでは、それぞれの人がある時点において、それまでの人生での出来事と、近い将来に予想される出来事から、自分の人生が今後どうなっていくの

---

1) 本稿の元となった予備分析の結果は、2004年6月13日に倉吉未来中心において開催された、2004年日本女性学会大会において報告された。

かのイメージを作り上げることもできる（岩井 2002）。ここでは、未婚女性が作り上げる人生のイメージにおいて、結婚や出産に伴い、就業をしない生活に移行する、「専業主婦的な」生き方がどのように捉えられているのかを検討する。専業主婦的なライフコースを理想と考えること（以下、「専業主婦願望」）、ならびに実際になりそうなライフコースは専業主婦的なものであると考えること（以下、「専業主婦予想」）について、教育レベル・働き方・収入といった社会経済的属性、ジェンダー役割に対する意識、親密圏での異性関係の状況などの要因に絡めて分析する。さらに、専業主婦願望と専業主婦予想の間のズレについても、同様の分析を行なう。分析には、国立社会保障・人口問題研究所が5年おきに実施している「出生動向基本調査」のデータを使用する。

## 1. 専業主婦の実態とそれに対する考え方

分析の前に、今日の日本社会において、専業主婦がどのような立場に置かれているのかを、簡単に述べておこう。

まず、専業主婦は実際にどのくらいの割合で存在するのかをみると、サラリーマンの夫の妻のうち、専業主婦である人は、1955年では75%であったが、1995年では46%と半数に満たない。すべての夫婦を基準にすると、サラリーマンと専業主婦のカップルが占める割合は1955年から1990年までを通して3割台で、ピークの1970年代末でも37%程度に過ぎなかった（大沢 2002）。つまり、専業主婦は少数派であり、たとえ、なりたくても簡単にはなれない存在であるといえる。

しかし、社会保障の制度面では、すべての夫婦に占める割合が4割にも満たない専業主婦を含む家族が支持されている。たとえば、雇用者に扶養される配偶者である第3号被保険者制度や、所得税の配偶者控除と配偶者特別控除制度は、専業主婦もしくは年収100万円前後以下での就労をする有配偶女性を優遇している。また、遺族年金も、夫の収入によっては、専業主婦の受ける額の方が共働きカップルの女性の受ける額よりも多くなることもある（大沢 2002）。平成16年度の所得分から、配偶者特別控除制度の「上乘せ分」が廃止されるなど、専業主婦を優遇せず、有配偶女性の就労を促進する方向に制度が変わっていく兆しも見られるが、当面は、相対的に見れば、専業主婦的な生き方の優遇が続くと思われる。

次に、近年の専業主婦を巡る世論をみると、石原里紗（2003）に例示されるような専業主婦バッシングと、林道義（1998）に見られるような専業主婦擁護論の双方が共存している。これらの両極端な見解がある一方で、一般的にはその中間にある考え方が支持されている。例えば内閣府が1992年、1995年、2000年および2002年に実施した調査（内閣府大臣官房政府広報室 2002）によると、「子どもができたなら職業をやめ、大きくなったら再び職業を持つ方がよい」という意見を支持する人の割合は4割前後であり、その割合は、他の意見を支持する人の割合よりも、2002年を除けば最も高い。一方、「ずっと職業を続ける方がよい」と考える人の割合は1992年の23%から2002年には38%に増え、「女性は職業をもたない方がよい」、あるいは「職業を持つのは結婚までか子どもができるまでがよい」

などの専業主婦的な生き方を支持する人は、1992年では30%であったのに対し、2002年では21%に減っている。近年では生涯を通して「専業主婦」的な生き方がよいと考える人は2割程度で、マイノリティーであることが明らかである。

## 2. 未婚女性が自分のライフコースとして捉える専業主婦という生き方

前節では、専業主婦という生き方は、社会保障制度や一部の人々によって支持されているが、数の上では少数派であり、世論等における捉えられ方も一貫していないことを示した。では、未婚女性が自分の人生の選択肢として考える際に、専業主婦はどのように捉えられているのだろうか。

専業主婦に対する気持ちや反応は、非常に複雑である。例えば、筆者が別のプロジェクトで行なった未婚女性に対するインタビューでは、「母のような専業主婦にはなりたくないと思うが、実はあのようにになりたいのかもしれない、しかし、なりたくても自分にはその才能はないし、結婚しても夫の収入には頼れないので働く必要がある」という内容の発言が聞かれた(釜野 2004)。一見、専業主婦を蔑むような気持ちを持ちながら、一方でそれが女性としてあるべき姿なのかもしれないという自問を繰り返す。母親をはじめとする専業主婦の「主婦業」を担う能力を評価し、自分にはそれができないだろうと思う。そして現在の経済状況や雇用環境を考慮し、結婚生活を維持するためには共働きをすることが必要であると考え。このように、未婚女性は、必ずしも意識しているとは限らないが、専業主婦というあり方に関して、各側面から考慮し、複雑な考えを持つに至っている。

では、複雑性を取り除き、「出生動向基本調査」のような量的調査の調査票という道具を介して、回答をひとつだけ選ぶ状況に置かれた場合、専業主婦に対する意識はどのように表われるのだろうか。ここでは、ライフコースについての質問に対する回答を通してみていくことにする。

表1に、過去3回の出生動向基本調査における、未婚女性の理想のライフコースならびに予想するライフコースの回答を示す。表2には、専業主婦願望と専業主婦予想のみについて、年齢階級別にその割合を示す。

専業主婦願望を持つ女性は減少傾向にあり、特に1992年

表1 未婚女性の理想のライフコースならびに予想するライフコース (%)

	1992	1997	2002	1987 (参考*)
理想のライフコース				
非婚就業継続	3.6	5.1	5.6	3.7
DINKS	4.7	5.1	4.2	2.5
両立	19.1	26.9	27.2	18.5
再就職	28.8	33.0	35.1	31.0
専業主婦	31.2	20.7	18.7	33.6
その他・わからない	3.8	1.6	1.7	1.2
不詳	8.7	7.6	7.4	9.4
予想するライフコース				
非婚就業継続	13.0	12.7	15.8	7.1
DINKS	3.4	3.7	4.9	1.4
両立	14.0	14.7	16.2	15.3
再就職	42.4	40.0	38.2	42.2
専業主婦	17.9	16.7	12.8	23.9
その他・わからない	4.4	2.3	2.4	1.5
不詳	5.0	9.9	9.6	8.6

\*1987年の調査の対象は35歳未満であったため、参考として掲載した。それぞれの「コース」の詳細は本文の2(2)を参照。

表2 年齢階級別にみた、「専業主婦願望」と「専業主婦予想」の推移

年齢階級	「専業主婦願望」 (%)				「専業主婦予想」 (%)			
	1987*	1992	1997	2002	1987*	1992	1997	2002
18-19歳	37.8	32.5	18.6	14.2	16.5	22.9	24.1	18.4
20-24歳	34.4	34.7	22.0	18.0	12.0	18.8	18.2	15.6
25-29歳	28.2	29.6	21.5	21.3	12.7	16.5	14.2	10.1
30-34歳	25.0	24.7	17.2	21.7	13.8	16.2	14.5	9.9
35-39歳	・	18.1	22.1	19.0	・	6.5	6.7	9.0
40-44歳	・	18.3	18.1	15.4	・	4.0	3.8	4.4
45-49歳	・	17.7	14.8	16.5	・	2.5	2.3	2.1
合計	33.6*	31.2	20.7	18.7	13.3*	17.9	16.7	12.8

不詳を除いて集計。\*：1987年調査の対象は35歳未満。

の3割から1997年の2割への減少は大きい。年齢階級別にみると、1992年と1997年との違いは、主として1992年に30歳未満だった層の変化によってもたらされていることがわかる。例えば、1992年に20～24歳であった女性（1972年生～1968年生）をみると、1992年では35%が専業主婦を理想としていたが、その割合は1997年（25～29歳）になった時には21%と大幅に低くなっている。専業主婦予想の割合も同様に減少傾向にあり、2002年の専業主婦予想の割合は12%、つまりおよそ8人に1人である。年齢階級別にみると、どの調査年においても若い人の方が、専業主婦予想の割合が高くなっている。ここで示した全体像からは、専業主婦という生き方は、理想としても予想としても未婚女性の多数派を占めたことはなく、さらに年々減少する傾向もがうかがえる。最近では若い人の中で「専業主婦」志向が広まりつつあるという見解もあるが（山田 1999）、このデータからはその傾向は観察されない。

言うまでもなく、専業主婦になりたいという願望と、実際に自分の人生がそうなるだろうという予想は一致するとは限らない。上記のデータについて、専業主婦願望と専業主婦予想のズレを示したのが表3である。専業主婦以外のライフコースを理想としながら、専業主婦になると予想する女性が全体を占める割合は、1992年の29%から1997年では18%に

表3 「専業主婦願望」と「専業主婦予想」の組み合わせ

「願望」	「予想」	1992		1997		2002	
		実数	%	実数	%	実数	%
「願望」と「予想」が一致しているケース							
専業主婦	専業主婦	208	5.6	158	4.5	107	3.1
専業主婦以外	専業主婦以外	1908	52.8	2229	63.4	2399	68.6
「ズレ」のあるケース							
専業主婦	専業主婦以外	467	12.9 (19.7%*)	497	14.1 (18.2%*)	392	11.2 (14.0%*)
専業主婦以外	専業主婦	1031	28.5 (83.2%**)	634	18.0 (80.1%**)	601	17.2 (84.9%**)
合計		3614	100	3518	100	3499	100

\*専業主婦願望に対する割合。 \*\*専業主婦以外の理想に対する割合。

減少し、2002年では17%である。また、専業主婦願望がありながら、それ以外のライフコースを予想する人の割合は、1992年から2002年にかけて、ほとんど変化せず、10%台前半である。

以下では、未婚女性が、専業主婦願望を持つこと、ならびに専業主婦予想をすることには、どのような要因が関連するのかを検討する。ライフコースの理想と予想は人生の主観的なイメージであり、それぞれの女性が「人生全体をどのように考えるか、ある段階での自分の能力や行動をどのように解釈するのかといった個人の認識」(岩井 2002)に関連している。女性の持つ人生のイメージには、個々の女性が置かれた立場やこれまでの経験や物事に対する考え方が大きく影響するが、社会経済的属性、ジェンダー役割に対する意識や親密圏での異性関係の経験などが、イメージを形成する材料となりうると思われる。そこで、ここでは、これらのイメージ形成の材料となりうる事柄と、専業主婦願望と専業主婦予想との関連をみる。表3に示した専業主婦願望と専業主婦予想の間のズレも、同様の材料によってもたらされると考え、それについての分析も行なう。

### 3. 「専業主婦願望」と「専業主婦予想」ならびにその「ズレ」に関連すると思われる要因(“説明変数”)

#### a. 社会経済的属性

ここでは、教育、現在の就業状況、収入を考慮する。高等教育を受ける、女子大学で教育を受ける、正規職員として働く、パートタイムで働く、収入を得る、収入がないといった、異なる「経験」によって、特定の価値観や思考パターンが養われ、専業主婦という生き方に対する意識も異なってくると思われる。さらに、教育を受けること、就業すること、収入が高いことは、いずれも女性の社会経済的な資源と見なすことができる。これらの資源をもっている女性ほど、それを手放したくないと考えるとすれば、社会的・経済的地位が高い女性の方が、専業主婦願望・予想が弱く、逆に社会的・経済的地位の高い女性の方が、専業主婦願望・予想が弱いのではないかと予想される。

#### b. ジェンダーに対する意識

ジェンダー役割に対する考え方、つまり、男性と女性がそれぞれ社会においてどのような役割を果たすべきか、どのような行動をするものなのか、といったことについての考えは、女性が自分の人生にどのようなイメージを持つかに重要な影響を与えると思われる。いわゆる「夫は外で働き、妻は家庭を守る」という考えに代表される形のジェンダー役割を支持する人ほど、専業主婦になりたいという願望を持ち、実際に専業主婦になるだろうと予想する傾向が強いと予想される。

#### c. 親密圏における異性との関係の状況

異性との関係は、ライフコースを考える面でこれまであまり注目されてこなかったが<sup>2)</sup>、男性と恋愛関係にあるかどうか、女性のライフコースに対する考え方に関連していると

2) 例外は、1987年の出生動向基本調査のデータを用いて、交際している異性のいる女性の方が専業主婦コースと非婚就業継続コースを予想する人が多いということを示した中野(1991)の論文である。

思われる。異性愛とは「違い」を強調することによって成り立っているものであり (Butler 1990, Connell 1987), 異性愛関係こそが、ジェンダーシステムの鍵を握っている。「女性」「男性」というカテゴリーの社会的定義には、異性愛関係にある（あろうとしている）ことが不可欠な条件とされている。例えば、男性とつきあうことで「本当の女」になったと認められることや、「いつまでも“女”でありたい」というフレーズに合意されるように、(正しい・本当の)「女」という定義を満たす人間であるためには、男性との恋愛関係がある／その対象となることが当然視される (Kamano, 1995)。その逆のメカニズムとして、男性とつきあうことによって、(正しい・本当の)「女性」であることを身につけ、それを演じるようになると考えられる。とりわけ、ロマンティック・ラブ主義に強く影響される「恋人」関係にある男女は、よりコンベンショナルな「男性」と「女性」の役割を演じながら、それを身につけて行くと考えられる (Goffman, 1977)。これは、女性が男性と恋人としてつきあうことをきっかけに、言動や見かけが「女らしく」なったり、「女性はこうあるべきである」といった、より伝統的な考え方を示すようになったりする、異性愛関係の中で「女性性」が作られていく現象とも共通するメカニズムである。これらの、親密な異性愛関係の中で養われる考え方や言動の中には、ライフコースに対する見解も含まれると考えることができる。女性にとって、男性との違いがもっとも明らかである生き方は、現在の日本で「男性」の役割として捉えられている賃労働に専念する生き方—稼ぎ手としての役割を果たすという生き方—と最も対照的な、「子どもを産み、賃労働をせず、子育てと家事に専念する」という生き方、つまりここで言う専業主婦的な生き方である。したがって、異性の恋人のいる女性ほど、専業主婦願望が強く、専業主婦予想も多いと予想される。

## II. 方法

### 1. データ

分析には、国立社会保障・人口問題研究所によって2002年に実施された第12回出生動向基本調査の独身者調査のデータを用いる。本調査は全国の国勢調査地区およそ80万から国民生活基礎調査に抽出された調査地区1048から、さらに600調査地区を系統抽出し、そこに居住する世帯に属する全ての独身男女を対象に実施された。調査票配布数は12866票、有効回収数は9686票で、有効回収率は75.3%である (国立社会保障・人口問題研究所 2004)。本稿での分析対象は、18歳～50歳未満の未婚女性3983人である。

### 2. 変数の指標

分析には、 $\chi^2$ 乗検定と2項ロジスティック回帰分析を用いるが、そこで使用する変数の指標は、以下のとおりである。

(1) 被説明変数：「専業主婦願望」と「専業主婦予想」の指標

「専業主婦願望」は、「下欄に女性の生き方のタイプがいくつか示してあります。あな

たの理想とする人生はどのタイプですか」という質問、「専業主婦予想」は、それに続く「理想は理想として、実際になりそうなあなたの人生はどのタイプですか」という問いへの回答を用いる。これらの質問に対する選択肢は次のとおりである。

- a. 結婚せず、仕事を一生続ける<非婚就業継続>
- b. 結婚するが子どもは持たず、仕事を一生続ける<DINKS>
- c. 結婚し子どもを持つが、仕事も一生続ける<両立>
- d. 結婚し子どもを持つが、結婚あるいは出産の機会にいったん退職し、子育て後に再び仕事を持つ<再就職>
- e. 結婚し子どもを持ち、結婚あるいは出産の機会に退職し、その後は仕事を持たない<専業主婦>
- f. その他

専業主婦願望ならびに専業主婦予想は、eを選んだ人を1とコードし、それ以外の人を0とコードする。不詳は、分析から除外する。

(2) 被説明変数：専業主婦願望と予想のズレ

願望と予想が同じ場合には、ズレ=0、異なる場合にはズレ=1とコードする。つまり、専業主婦願望のない人についての分析では、専業主婦予想がある人に1を与え、専業主婦予想のない人には、0を与える。同様に、専業主婦願望のある人については、専業主婦予想のない人に1を与え、専業主婦予想のある人に0を与える。

(3) 説明変数

- a. 教育レベル：中学校・高等学校卒業／短大・専修学校卒業／女子大学卒業／共学大学・大学院卒業

クロス集計表では、すべてのカテゴリーを使うが、2項ロジスティック回帰分析では、それぞれのカテゴリーをダミー変数としてコードし、共学大学・大学院卒業をレファレンスとする。

- b. 就業形態：正規就業／パートタイム／派遣・委嘱／自営／無職／学生

2項ロジスティック回帰分析では、現在の就業形態のカテゴリーそれぞれをダミー変数としてコードし、無職をレファレンスとする。また、2項ロジスティック回帰分析では、就業形態と収入の効果を同時に分析するため、収入のデータのない「学生」は分析から除外する。

- c. 収入：100万円未満／100万円・300万円未満、300万円・400万円未満／400万円以上  
無職の人の収入は0とみなし、100万円未満に含める。2項ロジスティック回帰分析では、400万円未満=0、400万円以上=1とコードする。

- d. ジェンダー役割意識：「結婚したら夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ」に対する意見（まったく賛成／どちらかといえば賛成／どちらかといえば反対／まったく反対）

2項ロジスティック回帰分析では、「まったく賛成」と「どちらかといえば賛成」を、ジェンダー役割を支持する意見として、1とコードし、「まったく反対」と

「どちらかといえば反対」を役割を支持しない意見として0とコードする。不詳は分析から除外する。

- e. 異性の恋人の有無：「あなたには現在交際している異性がありますか」（交際している異性はいない／友人として交際している異性がいる／恋人として交際している異性がいる／婚約者がいる）

恋人として交際している異性がいる人と婚約者がいる人を、「恋人あり」としてコードし1を与え、その他のケースには0を与える。但し、同棲しているケース（全体の2.3%）は、除外する。同棲の形は様々であるが、男性と実際に生活を共にすることと、それをせずに付き合うことは質的に異なるため、男性と生活を共にする関係にある女性のライフコースに関する考え方については別の分析が必要だと考える。

- f. 年齢階級：18～19歳／20～24歳／25～29歳／30～34歳／35～39歳／40～49歳

2項ロジスティック回帰分析では、年齢階級をコントロール変数として使用する。それぞれをダミー変数としてコードし、18～19歳をレファレンスとする。

- g. 結婚の意思：「自分の一生を通じて考えた場合、あなたの結婚に対するお考えは、次のうちどちらですか」（いずれ結婚するつもり／一生結婚するつもりはない）

いずれ結婚するつもり=1，不詳を含むそれ以外の人=0とコードする。不詳は、結婚するつもりと回答しなかったことから、結婚の意思を明示しなかったと解釈し、結婚するつもりはない方に含める。結婚の意思がなければ、理想でも予想でも専業主婦を選ぶことはほとんどないと思われるため、結婚の意思をコントロール変数として使用する。

### 3. 分析手法

分析Aでは、まず、専業主婦願望ならびに専業主婦予想と、各説明変数との関係を、クロス集計表ならびに $\chi$ 二乗検定によって見ていく。次に、専業主婦願望と専業主婦予想それぞれを被説明変数とし、2項ロジスティック回帰分析を行なう。

分析Bでは、専業主婦願望と専業主婦予想の間にズレがあるケースについての分析を行なうが、まず、専業主婦願望のない女性と専業主婦願望のある女性それぞれについて、ズレの有無をクロス集計し、 $\chi$ 二乗検定を行なう。次に、専業主婦願望のない女性について、ズレの有無を被説明変数とした2項ロジスティック回帰分析を行なう。同様に、専業主婦願望のある女性についても、ズレの有無を被説明変数とした2項ロジスティック回帰分析を行なう。

## III. 分析結果

### 1. 分析A：専業主婦願望ならびに専業主婦予想と説明変数の関連の分析

- (1) クロス集計表と $\chi$ 二乗検定の結果



表4には、それぞれの説明変数と、専業主婦願望ならびに専業主婦予想のクロス集計表と $\chi^2$ 二乗検定の結果を示す。

クロス集計表からは、次のことが読み取れる。まず、教育レベルをみると、中学校・高校卒では専業主婦願望を持つ割合が27%であるのに対し、共学大学・大学院卒では11%と、教育レベルが高いほど専業主婦願望の割合が低い。専業主婦予想の割合は、教育レベルによる違いは顕著でないが、女子大卒の人では2割と、他のグループの1割台と比べて高くなっている。就業形態をみると、無職の女性の専業主婦願望は高く、学生では低くなっている。専業主婦予想の割合は学生で2割、それ以外のグループでは15%以下である。収入別に見ると、年収400万円以上では14%、400万円未満では2割台と、年収400万円未満の人に専業主婦願望の割合が高い。専業主婦予想でも同じような傾向が見られ、年収400万円以上の女性は5%と極めて低い割合である。異性の恋人の有無は、恋人のいる人の方が専業主婦願望の割合が23%と、いない人の18%に比べると高いが、専業主婦予想には、恋人の有無による違いは見られなかった。ジェンダー意識をみると、ジェンダー

役割を支持する人ほど、専業主婦願望も専業主婦予想の割合が高くなっている。「結婚後は、夫は外で働き、妻は家庭を守る」という意見に「全く賛成」という女性のほぼ5割が

表4 社会経済的属性別・意識別「専業主婦願望」と「専業主婦予想」の割合(%)ならびに $\chi^2$ 二乗検定の結果

変数	「専業主婦願望」	「専業主婦予想」
教育レベル	$\chi^2 = 73.9^{***}$	$\chi^2 = 8.64^*$
中学校・高等学校	27.2	13.4
短大・高専・専修学校	19.0	14.0
女子大学	17.3	21.0
共学の大学・大学院	11.2	13.4
	(n=3601)	(n=3515)
就業形態	$\chi^2 = 54.0^{***}$	$\chi^2 = 24.6^{***}$
正規	20.5	12.0
パート	23.8	13.4
派遣	20.4	13.7
自営	19.1	12.6
無職	31.1	15.4
学生	11.9	20.0
	(n=3496)	(n=3413)
年齢階級	$\chi^2 = 17.2^{**}$	$\chi^2 = 49.7^{**}$
18~19歳	15.1	20.1
20~24歳	19.1	16.8
25~29歳	22.8	11.1
30~34歳	23.5	11.0
35~39歳	21.7	10.9
40~49歳	19.8	4.4
	(n=3648)	(n=3561)
収入	$\chi^2 = 11.0^*$	$\chi^2 = 13.5^{**}$
100万円未満	20.0	14.3
100~300万円未満	23.3	13.4
300万~400万円未満	20.6	11.3
400万円以上	14.0	5.3
	(n=2444)	(n=2380)
異性の恋人の有無	$\chi^2 = 11.9^{***}$	$\chi^2 = 2.09$
あり	23.3	13.1
なし	18.2	15.0
	(n=3290)	(n=3219)
結婚意思	$\chi^2 = 16.6^{***}$	$\chi^2 = 21.6^{***}$
あり	21.2	15.2
なし	12.4	6.3
	(n=3648)	(n=3561)
ジェンダー役割意識 (夫は外、妻は家庭)	$\chi^2 = 342.5^{***}$	$\chi^2 = 65.2^{***}$
全く賛成	49.5	25.6
どちらかといえば賛成	34.9	19.7
どちらかといえば反対	17.0	13.5
全く反対	6.9	8.9
	(n=3532)	(n=3444)

\*は5%水準で有意；\*\*は1%水準で有意；\*\*\*は0.1%水準で有意。  
2x2の表には、連続修正した $\chi^2$ 二乗を用いた。

専業主婦願望を示し、25%は実際にそう  
なると予想している。χ<sup>2</sup>乗検定では、  
これらの変数のすべてが、専業主婦願望  
と専業主婦予想に統計的有意な関連を示  
している。

(2) 専業主婦願望と専業主婦予想につ  
いての2項ロジスティック回帰分析の結  
果

次に「専業主婦願望」ならびに「専業  
主婦予想」それぞれについて、2項ロジ  
スティック回帰分析を行った。分析に使  
用する変数の単純集計は表5に、ロジス  
ティック回帰分析の結果は表6に示すと  
おりである。

上記のχ<sup>2</sup>乗検定ではほとんどの変数  
が専業主婦願望と専業主婦予想と関連が  
あるように見えたが、多変量解析を行な  
うと、統計的有意な効果を示す変数が少  
なくなり、特に専業主婦予想については  
それが顕著に見られた。専業主婦予想に  
比べ、専業主婦願望の方が、多くの要因  
が統計的有意な効果を示した。

具体的には、共学大学・大学院卒に比べ、中高卒や短大卒であることは、専業主婦願望  
を持つ確率を高める効果を示した。正規就業であることは、無職である場合に比べ、専業  
主婦願望を持つ確率を低める効果を示したが、他の就業形態と無職との違いはみられなかつ  
た。また、異性の恋人がいること、ならびにジェンダー役割を支持することは、専業主婦  
願望を持つ確率を高める効果を示した。コントロール変数として分析に導入した結婚意思  
は、そのあることが願望を持つ確率を高める効果が見られた。収入や年齢の効果は認め  
られなかった。

表6右カラムの専業主婦予想についての結果をみると、女子大学卒であることが、共学  
大学・大学院卒に比べ、専業主婦予想を持つ確率を高める効果がみられた。ジェンダー役  
割を支持すること、ならびに結婚意思のあることも、専業主婦予想を持つ確率を高める効  
果を示した。また、異性の恋人のいることは、専業主婦予想を持つ確率を低める効果を示  
した。就業形態と年齢階級による違いは認められなかった。

## 2. 分析B：専業主婦願望と専業主婦予想のズレの分析

### (1) クロス集計表とχ<sup>2</sup>乗検定

表5 分析に含まれる変数の単純集計 (%)

変数	n=2362 %
教育レベル	
中学校・高等学校	38.1
短大・高専・専修学校	41.4
女子大学	5.6
共学の大学・大学院	15.0
就業形態	
正規就業	58.9
パート	19.6
派遣	6.6
自営	3.7
無職	11.2
収入 400万円以上	8.2
年齢階級	
18～19歳	5.5
20～24歳	34.6
25～29歳	31.8
30～34歳	16.2
35～39歳	6.0
40～49歳	5.8
結婚の意思あり	91.2
異性の恋人あり	48.4
ジェンダー役割支持する	32.3
専業主婦願望あり (理想のライフコース)	22.7
専業主婦予想あり (予定のライフコース)	12.9

表6 「専業主婦願望」ならびに「専業主婦予想」についての2項ロジスティック回帰分析の結果

説明変数	専業主婦願望			専業主婦予想		
	B	SE	Exp( $\beta$ )	B	SE	Exp( $\beta$ )
教育レベル						
中学校・高等学校	1.031***	.195	2.803	.038	.210	1.039
短大・高専・専修学校	.644***	.193	1.904	.096	.204	1.100
女子大学	.483	.291	1.622	.567*	.294	1.763
△共学大学・大学院			1.000			1.000
就業形態						
正規	-.381*	.166	.683	-.219	.202	.803
パート	-.256	.187	.774	-.246	.229	.782
派遣	-.475	.256	.622	-.023	.292	.978
自営	-.362	.319	.696	-.024	.369	.976
△無職			1.000			1.000
収入						
△400万円未満			1.000			1.000
400万円以上	-.182	.239	.833	-.658	.348	.518
異性の恋人の有無						
あり	.279**	.108	1.322	-.340**	.131	.712
△なし			1.000			1.000
ジェンダー役割意識						
役割支持	1.334***	.105	3.796	.767***	.128	2.152
△役割支持せず			1.000			1.000
年齢階級						
△18-19歳			1.000			1.000
20-24歳	.153	.243	1.165	.224	.283	1.251
25-29歳	.335	.247	1.398	-.279	.296	.756
30-34歳	.335	.262	1.397	-.276	.317	.759
35-39歳	.234	.316	1.264	-.305	.388	.737
40-49歳	.337	.337	1.401	-1.711	.653	.181
結婚意思						
あり	.744**	.239	2.105	.947**	.357	2.578
△なし			1.000			1.000
切片		-3.225			-2.740	
-2 対数尤度		2266.25			1714.36	
$\chi^2$ 二乗		261.2***			103.1***	
自由度		16			16	
ケース数		2362			2362	

\*は5%水準で有意；\*\*は1%水準で有意；\*\*\*は0.1%水準で有意。

表7の左側には、専業主婦願望がない女性について、説明変数のカテゴリーごとに、専業主婦予想を持たない人の割合、つまり、理想のライフコースは専業主婦以外のものであるが、実際には、専業主婦になるだろうと予想する人の%、換言すれば、「本当はなりたくないのに専業主婦になるだろうと考える人」の%である。就業形態別に見ると、このズレを示す割合は、無職の女性で2割近くと一番高い。年齢階級別では、18～19歳では2割、20～24歳では17%と高めであり、他の年齢層では、1割に満たない。つまり、若い層でそ

の割合が高い。収入別にみると、年収が300万円未満の層では14%であるが、400万円以上の層になると5%に満たない。異性の恋人の有無による違いは、異性の恋人がいる人では12%、いない人では15%と、数値的な違いは大きくないが、統計的には有意である。結婚の意思の有無別に見ると、結婚の意思がある人では15%、ない人では7%である。ジェンダー役割に対する意識による違いは顕著で、ジェンダー役割を支持するほど、専業主婦になりたくないのになるだろうと考える割合が高くなっている。つまり専業主婦以外のライフコースを理想と考え、且つ「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ」という意見に「全く賛成」と考える人の3割が、実際には、専業主婦になるだろうと予想している。この割合は、ここで検討した要因別にみても、最も高い割合である。

表7の右側は、専業主婦願望のある女性について、説明変数のカテゴリーごとに、専業主婦予想を持たない人の割合、つまり、「本当は専業主婦になりたいが、実際にはなれないだろうと考える女性」の%を示す。まず、教育レベル別にみると、女子大卒での割合が他と比べて、32.4%と非常に高くなっている。収入別にみると、専業主婦

表7 「専業主婦願望」と「専業主婦予想」が一致しないケースの専業主婦予想のクロス集計と $\chi^2$ 乗検定の結果

変数	専業主婦願望なし ズレ=1 (専業主婦予想あり)	専業主婦願望あり ズレ=1 (専業主婦予想なし)
教育レベル	$\chi^2 = 4.494$	$\chi^2 = 18.7^{***}$
中学校・高等学校	15.1	9.6
短大・高専・専修学校	13.1	19.0
女子大学	18.2	32.4
共学の大学・大学院	13.1	15.6
	(n=2752)	(n=702)
就業形態	$\chi^2 = 21.7^{***}$	$\chi^2 = 4.65$
正規	11.6	13.9
パート	14.1	11.5
派遣	13.3	15.8
自営	11.6	19.0
無職	14.9	17.4
学生	19.8	21.3
	(n=2677)	(n=687)
年齢階級	$\chi^2 = 62.1^{**}$	$\chi^2 = 1.95$
18~19歳	21.6	12.0
20~24歳	17.1	16.2
25~29歳	9.9	15.8
30~34歳	9.3	16.0
35~39歳	9.6	13.9
40~49歳	2.9	9.1
	(n=2791)	(n=708)
収入	$\chi^2 = 18.9^{***}$	$\chi^2 = 4.89^*$
100万円未満	14.1	14.1
100~300万円未満	14.0	12.0
300万~400万円未満	8.7	21.9
400万円以上	4.2	19.9
	(n=1845)	(n=505)
異性の恋人の有無	$\chi^2 = 5.31^*$	$\chi^2 = 0.921$
あり	12.0	17.0
なし	15.3	14.0
	(n=2533)	(n=645)
結婚意思	$\chi^2 = 14.6^{***}$	$\chi^2 = 3.42$
あり	15.0	15.8
なし	7.0	4.4
	(n=2791)	(n=708)
ジェンダー役割意識 (夫は外、妻は家庭)	$\chi^2 = 65.7^{***}$	$\chi^2 = 7.80^*$
全く賛成	29.4	22.1
どちらかといえば賛成	21.3	17.0
どちらかといえば反対	14.3	10.6
全く反対	8.4	14.1
	(n=2709)	(n=689)

\*は5%水準で有意；\*\*は1%水準で有意；\*\*\*は0.1%水準で有意。2x2の表には、連続修正した $\chi^2$ 乗を用いた。

願望がある人の中で専業主婦にはならないと考える人は、100万円未満では14%、100万円～300万円未満では12%と低め、300万円～400万円未満と400万円以上では2割前後で、やや高めである。つまり、収入の高い人の方が、専業主婦になれない／ならないと考える人が多いことがわかる。結婚の意思別では、結婚の意思がある人では16%であるのに対し、結婚の意志のない人では5%に満たない。ジェンダー役割意識によって見ると、ジェンダー役割を支持する人の方が、専業主婦にはなりたいたいのになれないという割合が高くなっている。このズレに関しては、就業形態別、年齢階級別、異性の恋人の有無別による違いは見られなかった。

#### (2) 専業主婦願望と専業主婦予想のズレの2項ロジスティック回帰分析の結果

最後に、上記の2種類のズレについて、2項ロジスティック回帰分析を行った結果を表8に示す。

表の左側の専業主婦以外のライフコースを理想としている人についてのズレの分析結果からみていく。専業主婦を理想と考えるにも関わらず、専業主婦になると予想する確率は、収入が400万円以上であること、結婚の意思があること、ジェンダー役割を支持することによって高められる。逆に、異性の恋人のいることによって、その確率は低められる。また、40歳以上であることも、意図しないのに専業主婦になるだろうと考える確率を低めている。

表の右側に示すのは、「専業主婦を理想と考えているのに、予想ではそれ以外のライフコースになるだろうと考えている女性」についてのロジスティック回帰分析の結果である。どの変数の効果も統計的に有意ではなく、ここで考慮した説明変数によって、ズレの確率が高くなったり低くなったりすることはないことがわかる。専業主婦を理想であると考えの人が、専業主婦を予想するのか否か、つまり理想と予想の間にズレがあるのかどうかは、社会経済的要因によっても、また、異性の恋人の有無、ジェンダー役割意識、結婚の意思によっても、説明されなかったことになる。

## IV. 考察

上記の分析では、まず、専業主婦願望と専業主婦予想について、年齢階級と結婚意思の有無をコントロールした上で、教育レベル、就業形態、収入、ジェンダー役割意識、異性の恋人の有無との関連を、クロス集計表と $\chi^2$ 乗検定ならびに2項ロジスティック回帰分析によって分析した。次に、専業主婦願望はないが、実際には専業主婦になるだろうと考えること、ならびに専業主婦を理想とするが、実際にはならない・なれないだろうと考えることについても、同様の分析を行なった。2変数間の関連をみたときには、ほとんどの要因において予想した関連性が見られたが、他の変数の効果をコントロールした多変量解析では、関連があるという結論には至らなかったものも多数ある。下記では、2項ロジスティック回帰分析でみられた結果を、社会経済的属性、ジェンダー役割意識、親密圏での異性との関係の状況のそれぞれについての知見をまとめてみる。

表8 「専業主婦願望」と「専業主婦予想」が一致しないケースの2項ロジスティック回帰分析の結果

説明変数	専業主婦願望なし ズレ=1 (専業主婦予想あり=1)			専業主婦願望あり ズレ=1 (専業主婦予想なし=1)		
	B	SE	Exp( $\beta$ )	B	SE	Exp( $\beta$ )
教育レベル						
中学校・高等学校	.215	.235	1.240	.578	.486	1.782
短大・高専・専修学校	.013	.230	1.013	-.148	.463	.862
女子大学	.401	.345	1.493	-.828	.615	.437
△共学大学・大学院			1.000			1.000
就業形態						
正規	-.154	.246	.857	.375	.369	1.456
パート	-.132	.273	.876	.606	.449	1.834
派遣	.095	.345	1.100	.392	.573	1.480
自営	.052	.433	1.054	.166	.743	1.180
△無職			1.000			1.000
収入						
△400万円未満			1.000			1.000
400万円以上	-.953*	.442	.386	-.151	.602	.859
年齢階級						
△18-19歳			1.000			1.000
20-24歳	.022	.298	1.022	-7.176	17.99	.001
25-29歳	-.531	.317	.588	-6.891	18.00	.001
30-34歳	-.645	.348	.525	-7.080	18.00	.001
35-39歳	-.555	.432	.574	-6.868	18.00	.001
40-49歳	-1.672**	.663	.188	-.057	26.34	.944
異性の恋人の有無						
あり	-.496**	.157	.609	-.103	.260	.902
△なし			1.000			1.000
結婚意思						
あり	1.015**	.381	2.760	-.772	1.063	.462
△なし			1.000			1.000
ジェンダー役割意識						
役割支持	.858***	.152	2.358	-.502	.274	.605
△役割支持せず			1.000			1.000
切片		-2.616			9.371	
-2 対数尤度		1274.45			403.78	
$\chi^2$ 二乗		100.81***			37.09**	
自由度		16			16	
ケース数		1827			535	

\*は5%水準で有意；\*\*は1%水準で有意；\*\*\*は0.1%水準で有意。

本稿の分析で得られた社会経済的的属性に関する結果で最も顕著なのは、教育の効果であろう。専業主婦願望や専業主婦予想には、教育レベルによる違いがあることが浮かび上がった。これは、目黒らの研究(2001)でみられた、ジェンダー意識や母親意識の学歴による差異は大きく、高学歴女性は「結婚して、出産して、子育てをする」という人生に対し、否定的であるという結果とも一致している。ここでの分析でも、高学歴の女性に「結婚し、

出産して子育てをするが、就業はしない」という生き方を、理想とは考えていない傾向が見られた。大学に行くことによって、専業主婦的な生き方を理想と見なさないような考え方が養われる、周りから就業を続けることを期待される、実際にそれが可能だと思える環境に置かれるチャンスが多いといった効果に加え、もともと専業主婦という生き方を理想とは思わない人が、共学の大学や大学院に進む、というセルフセレクションの結果でもあろう。

教育に関する結果でもう一つ興味深いのは、女子大学を卒業するということが、専業主婦予想を持つ確率を高めるという結果である。専業主婦予想については、教育年数の長短やレベルよりも、女子大という教育のコンテキストが重要であることを意味している。「女子大学」の教育方針は様々であるが、全体をならしてみると、女子大学に行くという経験や、女子大学を卒業した女性に対する社会の反応や期待が、専業主婦予想に貢献していると考えられる。また、そもそも専業主婦になるだろうと思っている女性が女子大に行く傾向がある可能性も否定できない。

次に、女性の経済的基盤の指標ともいえる、収入や就業形態についてみると、他の要因をコントロールした結果、収入が400万円以上あるか否かは、専業主婦願望との関連を示さなかったが、正規就業していることは、専業主婦願望を持たない方向に貢献している。現在の収入そのものよりも、正規就業しているという安定感や、正規職員の置かれた日常的环境が、専業主婦を理想と考えないことに貢献しているのであろう。また、もともと専業主婦を望んでいない人の方が、正規就業をする傾向にある可能性も見のがせない。専業主婦になるだろうという予想には、収入によって表わされる現在の経済的状況とは関連がみられないことは興味深い。

しかし、収入は専業主婦になりたくないのに実際にはなるだろうと考えることには関連を示した。収入が高いことは、専業主婦になることが理想であると考えたり、実際になるだろうと考えたりすることには影響しなくても、意に反して専業主婦になるだろうと考えてしまうことに対する防御因子の役目を果たしているといえる。

ジェンダー役割に対する意識に関しての結果について述べると、ジェンダー役割意識は、社会経済的な属性をコントロールしても、専業主婦的な生き方を理想とするかどうか、また、そうなると予想するかどうかを大きく左右している。この結果はある意味では自明であるが、社会経済的屬性による違いに比べ強い関連を示した。特に専業主婦を理想とするかどうかとの関連は非常に強い。また、ジェンダー役割に対する意識は、専業主婦願望のない人が、実際には専業主婦になるだろうと考える確率にも影響することがわかった。ジェンダー役割を支持する人の方が、専業主婦が理想的であると考えていないにも関わらず、実際には、なるだろうと考える傾向があることを意味する。男女の役割とは、このようなものであるべきという意識があるため、理想ではなくても、実際にはそうなるのだろう、と思いがちになると解釈することができる。

最後に、異性の恋人の有無で指標化した、親密圏における異性との関係の状況をみると、異性の恋人のいることは、教育、収入、就業状況、結婚の意思、ジェンダー役割意識、年

齢をコントロールしても、専業主婦願望を高める効果があることがわかった。しかし、一方で、恋人がいることは、実際に専業主婦になると思う割合を低める効果もある。つまり、男性とつきあっていると、理想面ではよりコンベンショナルなジェンダー役割意識に近いものになるが、実際に想定する人生イメージはより現実的になるのである。実際に男性とつきあうことで、結婚した後の生活を、具体的且つ現実的なものとして捉えるようになると思われる。男性の恋人のいることで、結婚後の生活、つまり、専業主婦的な生き方を生涯続けている女性は実際には少ないことや、結婚しても、相手1人の収入でやっていくのは難しいことなどを実感するのではないかと考えられる。

また、男性の恋人のいる女性の方がいない女性に比べ、理想は専業主婦以外である場合に、実際には専業主婦になると予想する傾向が弱い。男性の恋人がいて専業主婦を理想であるとは考えない女性は、理想としてイメージする人生と、実際になるとイメージする人生とのギャップが小さく、現実的な見方をする傾向があると解釈することができよう。

## V. おわりに

本稿では、未婚女性の専業主婦という生き方を理想と考えることや、それを実際になるだろうと予想することに関わる要因、ならびに理想と予想のズレに関わる要因を分析した。女性の人生に対するイメージに大きく影響するのは、教育レベルや教育コンテクスト、ジェンダー役割意識、そして異性の恋人の有無であった。異性の恋人がいることは、専業主婦を理想と見ることに貢献するが、実際になる人生としてのイメージにおいては、専業主婦以外のものを想定する傾向を高めることが、本稿での最も興味深い知見である。この知見をさらに深めるために、別の機会に、実際に付き合っている男性の属性や、その相手との結婚の可能性の認識などを含めた分析を試みたい。また、本稿では、自分の人生をイメージした際の専業主婦の位置づけに関する分析にとどまったが、異性愛関係にあることが、男性と女性の意識や行動のどのような面にどのような形で影響するのか、それはどのようなメカニズムによるのかといったことを研究して行くことが重要であると考えられる。婚姻関係にある男女のあり方については、すでに多数の研究が蓄積され、男性の家事遂行が極めて少ないことや、ドメスティックバイオレンスなどに現れる権力関係が偏在していることも明らかにされているが、いずれは、婚姻関係になるかもしれない男女間の恋愛関係に潜む権力やジェンダーバイアス、そしてその関係を取り巻くジェンダー・イデオロギーを理解し、場合によってはそのあり方をより平等なものにしていくような提言をすることも、真の意味での男女共同参画社会の形成に貢献すると考える。



## 文献

- Butler, Judith (1999) *Gender Trouble*, Routledge.
- Connell, R. W (1987) *Gender and Power*, Stanford University Press.
- Goffman, Erving (1977) "The arrangement between the sexes," *Theory and Society*, 4: 301-331.
- 林道義 (1998) 『主婦の復権』講談社.
- 石原里沙 (2003) 『くたばれ！専業主婦』光文社.
- 岩井八郎 (2002) 「ライフコース論からのアプローチ」石原邦雄編『家族と職業—競合と調整』ミネルヴァ書房, pp.37-61.
- 岩上真珠 (2003) 『ライフコースとジェンダーで読む家族』有斐閣.
- Kamano, Saori (1995) *Same-sex sexual/intimate relationships: A cross-national analyses of the interlinkages among naming, the gender system and gay and lesbian resistance activities*. Ph.D. Dissertation, Department of Sociology, Stanford University.
- 釜野さおり (2004) 「独身男女の描く結婚像」『少子化のジェンダー分析』勁草書房.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2004) 『わが国独身層の結婚観と家族観 第12回出生動向基本調査(結婚と出産に関する全国調査) -第II報告書-』(調査研究報告資料第19号).
- 目黒依子 (2001) 「就業や結婚はライフスタイルの選択肢に変化 多様な生き方を選ぶ「個人」単位の社会へ」『こども未来』12月, pp.7-9.
- 内閣府大臣官房政府広報室 (2002) 「男女共同参画社会に関する世論調査」『世論調査報告概要平成14年7月調査』.
- 中野英子 (1991) 「未婚女子の結婚観—ライフコースとの関連で—」『人口問題研究』第47巻第3号, pp.41-52.
- 大沢真理 (2002) 『男女共同参画社会をつくる』日本放送出版会.
- 山田昌弘 (1999) 『家族のリストラクチャリング』新曜社.

## A Life as a Full-Time Housewife?: Never-Married Women's Ideal and Expected Life-Course

Saori KAMANO

In this paper, I first provided a brief description of the situation of full-time housewives in Japan today, including the ways in which housewives are supported by the social security system, how the general public views various life-courses of women and what type of life-course never-married women see as ideal and what type of life-course they expect for themselves. Next, using the never-married women's data from the 12th Japanese National Fertility Survey conducted in 2002 by the National Institute of Population and Social Security Research, I examined two dimensions of the subjective view held by never-married women about their own life-courses: whether or not the women consider living as housewives as an ideal for themselves ("housewife desire"), and whether or not they actually expect to live as housewives ("housewife expectation"). Living as a housewife in this study refers to a life-course in which a woman works outside the home until marriage or childbirth and does not go back to work afterwards.

I first undertook bi-variate analyses of "housewife desire" and "housewife expectation" with socio-economic characteristics (level of education, work status and income), gender attitudes and heterosexual experiences (whether or not she is currently involved in an intimate relationship with a man). I then undertook binomial logistic regression analyses with the same variables, controlling for age group and women's intention of getting married. The same analyses were repeated for the gap between the presence and absence of "housewife desire" and "housewife expectation."

The results of the analyses revealed that a higher level of education increased the odds of having "housewife desire" while graduating from women's universities increased the odds of having "housewife expectation." Gender attitude, operationalized as the response to the question "In marriage, a husband should work outside while a wife should stay home and maintain the home," has the greatest and statistically significant effects on both "housewife expectation" and "housewife desire." The most intriguing findings are that having a steady male partner increased the odds of having "housewife desire" while it decreased the odds of having "housewife expectation." It is highly possible that being in a heterosexual intimate relationship encourages a way of thinking consistent with a more conventional gender ideology that supports full-time housewifery as a way of life and which at the same time promotes a more realistic understanding of married life in which both men and women have to bring in income earn to maintain a family. Further research is suggested to look more into the ideology surrounding heterosexual intimate relationships and actual interactions within such relationships.